〔書評〕

今井文男著「表現学仮説」

塚原鉄雄

この著作は、「表現」についての学的体系を樹立することが意図されている。そして、その内容は、七章から構成される。すなわち、第一章では、表現の座標が、第二章では、表現の構造が、第三章では、表現の主体が、第四章では、表現の方法が、第五章では、表現の過程が、それぞれ、考究される。そして、第六章では、表現の機能を、三種のテーゼによって解明しようとする。三種のテーゼとは、レフ（ref.＜reflexion）と、直観と、そして、遠近法とである。さらに、第七章では、その具体的な実験を実施している。

著者の論述を要約し、この著作の梗概を記述して、その内容を簡単に紹介しておこう。

第一章は、なぜ文章は終わるか、ということである。文章が終わる——あるいは、終わらせうる——理由は、表現主体の把握する全体に連繋する。ここでいう全体とは、主体に対立する現実全体、あるいは生一般といったような全体ではない。表現主体の把握した全体である。

文章は、根源的にいえば、単語として把握しうる。単語として把握しえない全体（直観）では、文章以外の方法で表現しなくてはならなくなる。

果無し話は、筋その他を設定する部分と、果無しにくり返される部分とに、次元のちがった形象化がはたらいている。話し手の心では、果無しの繰り返しの部分は、一度だけ動作を語れば、あとは「等々」で切り上げてまとめることのできることであり、そういうまとまりとして話し手の心の中にあるものを、全体とよぶ。

視野の転換が、途中にある文章は、さきに見ておしていた全体を、もう一度あたらしい遠近法で見渡しなおす操作がはたらいているのである。

文章の冒頭は、全体の座標系をきめる役割をしている。書こうとする全体を全体として、構成的に描き出すためには、一つの座標系に組み入れなくてはならない。

第二章は、なぜ文は積みかさねうるか、ということである。文が積みかさねられるためには、五種の条件を必要とする。

第一条件　最初におかれる文がなくてはならない。はじめのないものに、積みかさねる操作はありえないからである。

第二条件　文は、終っていなくてはならない。終わらない文は、つぎにまた、あらたな文をよぶことができないからである。

第三条件　語と文と文章とが、同質の言語性を持たなければならない。文章の立場から、文と語とをみるとき、文章を統一する原理は、文にも、語にもはたらいている。語と文と文章とに、同質性がなければ、語を用いて文をなしうることも、文が文を包むことも不可能である。

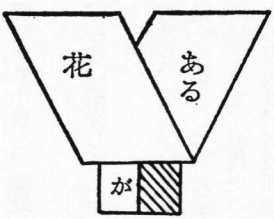
第四条件　表現主体が、レフ（Reflexion「ひるがえり」と「ひるがえし」と）の作用を果さなければならない。

第一のレフは、「現物」を「本」という語で代表させるレフである。「本」という語と、「現物」との断絶をこえるために意識は、レフをする。

第二のレフは、「現場」である「本」を、いろいろに中心転換して語としてつかみとるレフである。「美しい」などという修飾語も、このレフによる。「美しい」とするのは、「現物」を「本」だとみる立場からはでてこない。かならず、視点がひるがえされている。「現物」の「本」に重なって「美しい」の概念が二重視される。

第三のレフは、判断における意識のレフである。「現物」を志向するとき、「現物」をレフして「ある」という判断をつかみだす一次的意識と、さらに、「ある」という判断をレフして「花」をつかみだす、随伴的な二重の意識が、同一の表現主体を軸――「レフの座」――として生ずる。

この二つの意識の相互関係は、第二のレフの場合と同様である。「花がある」という表現によって図示しておこう。



これを、時枝学説の入子型構造にならって、「扇子型構造」と名づける。時枝博士のいう「辞」は、このレフの座に位置する。

第四のレフは、語それ自体におけるレフである。語が物と名とを結合するものではなく、それ自体が「現物」とは別の体制であり、語自体が所記と能記とのレフ構造をもち、このゆえに、「意味の幅」をもちうる。

第五のレフは、第一のレフから第四のレフまでのケースの上に立って、それらのものを表現の機構のうちに整序する機能としてのレフである。レフされたものを「ふりほどき」、一行構造にくみいれるのである。

「ふりほどかれたもの」には、どれにも、「レフの座」が与えられる。それらの「レフの座」を示し、ふりほどかれたものと、ふりほどかれたものとの間の空白を充塡する語に、発語、助詞、助動詞などがある。

第一のレフから、第五のレフまでの原理は、文と文との積み重ねにおいても、同様にはたらく。

第三章は、何が文を作らせるか、ということである。文章を作らせるものは、直観である。直観は、表現の終わるまで表現を導びきつづける。

直観は、表現にむかうエネルギーをふくんでおり、外化せられない以前のものである。表象であれ、概念であれ、心のうち

に見られる、あるいは考えられている「全体」が直観である。

第四章は、何が文章のしくみにはたらくか、ということである。文章のしくみにはたらくものは、距離をもった目、すなわち、遠近法である。

日本民族は、言語的空間をうちたてるために、近いものから遠いものへの方向や順序に依拠して認識した時期から、その逆の、遠いものから近いものへの方向や順序に依拠して認識した時期に移ったか、あるいは、両者が共存したけれども、次第に、後者が主導的となったかして、人びとをそういう認識法に同化させていった。

具体例「はげしく(III) ほえる(II) 犬(I)」で説明すると、全体の場は、犬のはげしく吠えている状況である。人間が、その状況を認めた。そのとき、焦点は、「犬」にあてられていると仮定する。その場面を、言語で表現するとき、直観をひらいて、最初に、「犬」ということばをつかみだす。つぎに、「ほえる」を、さらに、「はげしく」を、逐次、つかみだすのである。この分析を整理して、他人に伝えようとするとき、さきの意識順序を、全部ひるがえして、それと逆の表現順序で表現する。

また、「犬が(III) はげしく(II) ほえる(I)」といった場合には、「ほえる」を、意識の焦点と考える。

語と文と文章とは、遠くから、原視点に帰着して表現を完了する、自己還帰性を有する。

第五章は、どういう表現過程をとるか、ということである。表現は、「対」、「待」、「体」の三つの段階を経過して成立する。もちろん、表現の完成が、この「対→待→体」の一回だけの過程で成立するとはかぎらない。

「対」とは、対象に「むかいあう」ことである。「待」とは、表現主体の側が、対象を生かすために「待つ」ことである。「体」とは、表現が完成して、それが、「文体」をもつこと、表現主体の認識の側からいえば、そのことによって「認する」ことである。

第六章は、どこに文芸は成立するか、ということである。文芸は、表現において成立し、その表現機構は、一行構造であり、一行に組み入られるものは、主体によってレフされたものであり、それらは、ある種の遠近法にかかる。遠近法の視点は、「われ」「いま」「ここ」の三者に置かれ、それで全体を統一する。レフされたものは、このとき、視点によって秩序づけられ、その秩序にしたがって結合させられる。結合が、そこに交響を来し、さらに、それらが自乗しあうことによって、思想を醞醸し、そこに、文芸がおのずから形成されていく。

第七章は、各種の試論である。ここでは、著者の立場を具体的に基礎づけ、あるいは、著者の立場を具体的に展開する小篇を、集録している。

粗雑な要約であったが、この著作の概要は、一往、紹介しえたかと思量する。そこで、若干の卑見を附加しておこう。

時枝誠記博士の言語過程説は、近代科学の方法を、国語学に導入した。すなわち、学的仮説を措定し、その仮説を前提として、対象を分析する方法である。国語学史は、時枝理論によって、現代史の開幕を実現しえたといえよう。だが、国語学史の現代は、時枝理論

による序幕だけで停滞してしまった。時枝理論を対象とする賛否の論議は、活潑であった。けれども、時枝理論の登場が意味するところについては、概言して、顧慮されることがなかったのである。それだけではない。むしろ、大勢は、時枝理論の提示した学的および学史的意義の検討を迂回して、作業としての言語調査に回帰する傾向が濃厚であった。

勿論、言語の原理に関与する理論が、提示されなかったわけではない。時枝学説に刺激されて、それは、数的には多種の提言が輩出し、量的にも大部な立言が提示された。しかしながら、それらの多数は、体系の欠如した、微視的な落想でなければ、敷衍を拒否した、小宇宙的な瞑想であったといえよう。

しかるに、この著作は、「表現」の学的体系を志向しながら、幅広い考察に基礎づけられた仮説を樹立しようとする。科学としての言語研究を放擲したかと印象づけられる今日の国語学会において、今井理論の提示は、快事といってよい。ここに、この著作の、学史的意義の第一がある。

学問は、過去の学説を、肯定的にあるいは否定的に継承して発展する、人間の営為である。学史の座標に位置づけられない研究は、学問とは看做しがたい。それは、単なる発明や発見と相等しい作業である。無論、発明や発見も、学史の座標に位置づけられることによって、学問的に編入される。このことで、学問のセクト主義を主張しようとするのではない。少なくとも、近代の学問は、そうした歴史的位置を獲得することによって、進歩し、発展したのである。

先行の学説を、学的な対象とするだけに終始せず、自己の研究の歴史的背景として把握することは、学問研究に要求される重要事項である。そして、人文科学においては、自然科学よりも、その要求が峻厳でなければならない。なぜならば、人文科学は、客観的かつ絶対的な体系に帰納する、実験という方法を具有しないからである。事例による立証は、実験による立証と等同でない。事例を抽出する資料相互の同値性もしくは同質性の判定は、研究主体の恣意から、究極的には脱却しえないのである。人文科学における学的体系の意義と妥当性とは、学史的な座標において確認される。

とすれば、今日の国語学において、学史的観点から把握し、それを超剋することによって、自己の試論を学史の座標に位置づけうるものは、何であるか。それは、時枝博士の言語過程説を除外しては、想到しえないであろう。事実、時枝学説は、数少なくない研究者が、研究対象としたところである。だが、それらは、一般に、学的対象として規定されたにすぎない。時枝学説を、学史的座標の定点として、自己の試論を、位置づけさらに組織づけようとした事例は、極度に乏少であった。

今井学説は、言語を、表現行動の観点から把握することで、時枝学説を継承する。さらに、時枝学説を文法論の縄縛から解放し、表現論の領域へ批判的に展開させたことで、時枝学説を発展させた。学史的に理解すれば、時枝理論の継承と発展とを実現させた一例が、著者のいう「表現学」であると看做しえよう。

勿論、この認定は、今井理論が、時枝理論の後継者であると規定することではない。しかし、後継者であると否とに関係なく、今井理論が、時枝学説を発展させた事実は、明白であるといえよう。ここに、この著作の、学史的意義の第二がある。

つぎに、今井理論の学的意義について、私見の一端を披瀝する。

時枝理論の画期的な特色の一つに、言語を、言語主体と客体素材との弁証法的統一という、行動の原理として考察することがある。この原理は、しかしながら、具体的な言語事実を説明する段階になると、必らずしも、一貫して徹底的に維持されたわけではない。例示すれば、現実の客体的な素材を対象とする、主体的な志向作用として、語を説明する。しかるに、文中の語を説明するときには、入子型の構造における役割だけで処理するのである。そして、文中の語と、現実の客体的な素材との直接的な連繋、その概念化の過程については、言及するところがない。

こうした矛盾を、今井理論は、新規の学的範疇において解決しようとする。文法論は、その対象と伝統とからして、動態的観点を導入することに、限度がある。結局は、静態的形式の記述と説明とに帰着してしまう。そこに、文法論の限界があろう。それに比較すれば、今井理論では、表現行動それ自体を対象とするのであるから、動態的観点から言語を解明するのに、絶好の立場であるといえよう。

文を構成する語が、それぞれ、「現物」からレフされたものであって、それらは、同一表現主体の意識で、「扇子型」に統一しているという仮説である。この仮説は、言語を、行動の論理によって、生体で把握しようとするものである。

表現の統一を、表現主体の意識に求尋し、それを「レフの座」とする。「辞」や「零記号」といった「語」に置換することのない今井理論に立脚すれば、「零記号などと、ないものがあるとはなにごとだ。」といったふうな議論は、必要がなくなるであろう。

このように、従来の文法論では解明されなかった文章機構が、斬新な立場から追求されている。こうなると、文法論は、必然的に、その範疇を明確にして、独立性を確立することが、要求されるであろう。とともに、表現論——表現学も、その対象と方法とにおいて、厳密な独立性を明示しなければならない。表現を学的対象とする試論は、文法論や哲学や心理学や文芸学などに、霧散して摂取されてしまう危険性を、孕胎しているからである。

とまれ、今井理論は、表現行動——言語過程を、言語形式の投影図として把握しない。いわば、実物大の立体として把握することを、学問として実現しようと努力している。ここに、この著作の学的意義がある。

だが、表現研究には、極度に堅固な障壁が、その前途を妨碍しているといえよう。それは、対象が、顕在しないということである。表現研究の対象となる表現は、内観的な方法でしか把握しえない。研究者の直接に把握しうる、顕在する現象は、言語現象だけである。

ところで、今井理論によれば、「現場」からレフした意識の体系と、それをレフした言語の体系とは、次元を異にする。とすれば、意識の体系を把握することが、どのようにして可能であるのか。言語の体系のフィルターを除去する方法は、どのようにして定立しうるのであろうか。すなわち、言語の構造に幻惑されることなく、表現の過程を学的対象として抽出しうるのであろうか。抽出しうるとして、その方法は如何。

こうした根本的な疑義の解決が、今井理論では、まだ保留されている。だが、この疑義を解明するのでなければ、その表現学の学的独立性を、完全に確保することは、困難なのではあるまいか。ま

た、内観的な方法への依拠から脱出しえないとすれば、それは、科学から宗教への転化を、究極的には拒否しえないことになろう。

そうした傾向の徴表は、着実な論述によって維持されているにもかかわらず、散見されるのである。例示すれば、イエスペルセンの「(The)^{I} dog ^{II}barks ^{III}fiercely.」の段階づけを批判する言辞に、それが看取される。すなわち、「意識のレフを中心にみないで、文法上の説明のための分類であるから、あるいは、日本人と西欧人との認識のしかた、したがって表現のしかたのちがいであるといった方が適切であるかもしれないが、わたくしと合致しないのもやむをえないことである。わたくしにあっては、やはり、犬が^{III}はげしく^{II}ほえる^{I}。なのである。ここでは、「ほえる」が意識の焦点になっており、したがって一次語なのである。」（一一三ページ）と立言する。これは、論証というより主張であり、解説というより確信である。なぜなら、「ほえる」が、意識の焦点であると固定しうる客観的な論拠が、明示されていない。一般的な理由づけに、置換されている。恣意的な想像によれば、そのような固定が可能なのは、語の順序からの帰納に基礎づけられているのではあるまいか。もし、そうだとすれば、文法と意識との連繋が、さらに追求されなければなるまい。

「^{III}はげしく　^{II}ほえる　^{I}犬」について、「まず全体の場は、犬のはげしくほえている状況そのものである。ひとはそれをみとめた。このとき焦点は「犬」にあてられていると仮定しよう。つづいてその場面を、ことばで表現しなくてはならぬ。そのとき直観をひらいて、最初につかみだしてきたものが、「犬」ということばであるのはあたりまえであろう。」（一一三ページ）とする説明がある。ここでは、意識の焦点を固定しないのである。しかも、これら二条の引用を比較すると、「直観」と「意識」との混乱が印象づけられるのは、誤解であろうか。

混乱といえば、「意識順序の逆に表現順序をとるという仮説」と、第四章で説明する遠近法とを照合するとき、「認識」と「意識」との混乱が、若干、認知されるようである。

今井理論でいう「意識順序」とは、「認識順序」のことではあるまいか。なぜなら、意識における順序とは、表現主体の、「現物」に対する志向作用の時間的展開である。表現主体の視点によって規定される空間的遠近とは、別種の概念でなければなるまい。

斬新な学問体系は、批判するには容易であるけれども、創造するのは困難である。著者に満腔の敬意を表呈するとともに、卒読の誤解や浅学の放言に、著者が寛仁であることを期待したい。

—大阪市立大学助教授—